近江の石燈籠

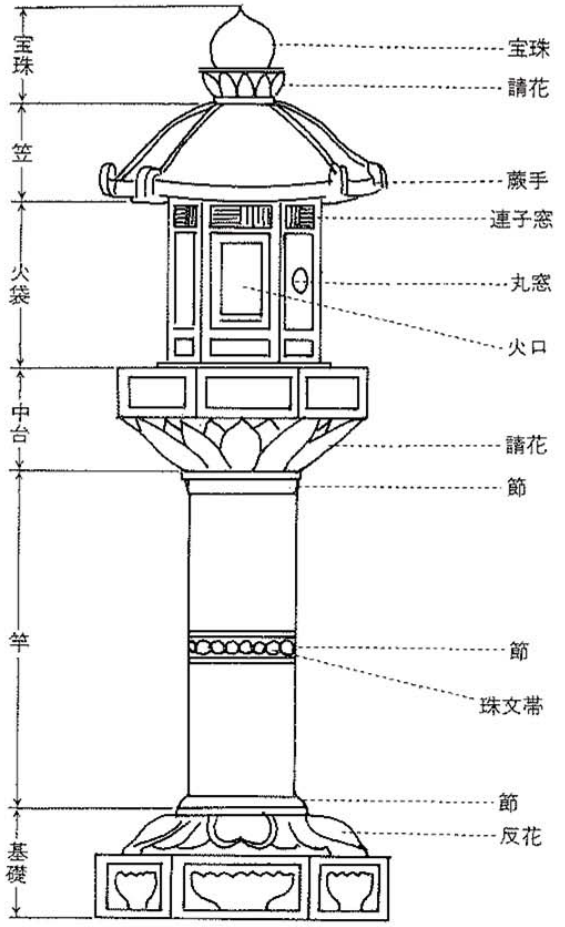
はじめに　――歴史と構造――

石燈籠は、いままでに述べた層塔・宝塔などの石造品と違って、神社や寺院はいうまでもなく、民家の庭園にも、また町の辻や思いがけない所にも建っていて、いつも私達の身近にあって親しみを感じさせられます。

もともと石燈籠（以下、この号では単に「燈籠」と表現します）は、仏前に燈明を上げるための器ですから、仏教と共に大陸から渡って来たものと考えられます。その頃は寺院の堂前に１基だけ建てていましたが、平安時代には神社にも建てられるようになり、室町時代の末になると建物の前に１対、つまり左右２基並べて建てるようになりました。桃山時代になって茶の湯が流行するようになりますと庭園に建てることが始まります。茶室近くに足元を照らす明かりとしたり、水際のともし火として使われましたが、これがやがて社寺の参道に並び、道標にもなり、民家の庭園の景物として鑑賞用にも造られるようになって、私達の生活の中で生きづいて来たのは江戸時代のことです。

その形も、はじめは八角形や六角形ですが、鎌倉時代末には四角形のものも見られ、鑑賞用として庭園に使われだす頃になりますと色色の変り型が生まれました。円形のものや、基礎のない生め込型や、雪見燈籠と呼ばれている竿のない脚付型や、もっと極端な化燈籠といわれる火袋だけ加工し他は自然石を積んだ野趣のある山燈籠まで、無数の型が生まれてきました。

さて、燈籠の基本的な構造は、挿図のように基礎・竿・中台・火袋・笠・宝珠から構成されます。八角形・六角形・四角形の燈籠は、それぞれ同じ形の基礎・中台・火袋・笠の平面をもちますが、竿だけは円柱になっているのが普通です（たまには角柱の場合もあります）。基礎は他の石塔と同じです。竿は上中下の３節をつくりますが、近江の燈籠では中節の中央帯に連珠文を作り出しているのが特色です。中台は、基礎を逆さにした形で、下部には単弁の請花を飾りますが、近江の古いものではこの下部が厚いのが特色となっています。側面も背が低く、輪郭をつくったり格狭間を入れたりし、中に飾りを彫り出したりするのもあります。また側面を造らず、請花の上端に直接火袋段をつくる蓮台式といわれるものもあります。火袋は大体上中下の三区画に分け、上段は連子窓飾りとし、下段は左



財団法人　滋賀県文化財保護協会

右二区（たまに一区）に分けて、それぞれに中台側面に似た飾りをつけます。中段こそ燈籠の本来の役目をなす所で、火口と火気を出す窓とをつくり、壁面になる所に扉形を飾ったり、仏像や梵字などを刻んでいる丁寧なものもあります。笠は軒の角に蕨手をつくり出すのがふつうです。屋根は、稜線が直線のもの、中ほどのたるんだもの（照屋根）や上にむくっているもの（起屋根）、上部がむくり下部でたるんでいるもの（照り起り）の３形がありますが、照り起りの屋根が一般に多いようです。ただ、四角形の燈籠には、笠に蕨手がなく、竿に節もなく飾りもつけない素朴なものが多く、変り型はこの型から展開していくといってよいでしょう。

13世紀の燈籠

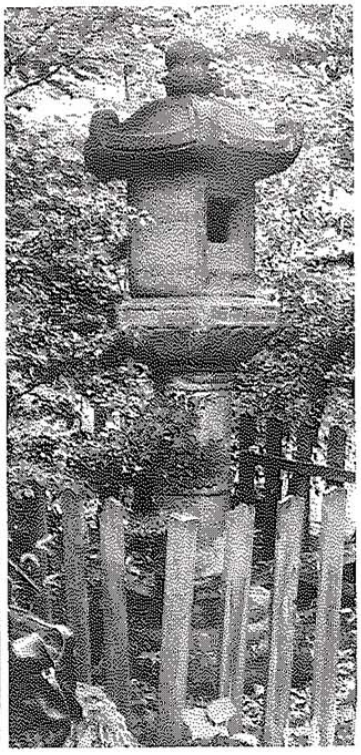
県下で一番古い銘のある燈籠は、大津市瀬田神領町にある建部神社の六角形燈籠(重文)です。本殿玉垣外の右方柵内に建ち、高さ 223 cm、中台より上部は少し重々しく、これを細い竿がしっかりと受けた力強い姿は、古式を受け継いだ見事な出来ばえです。中台下部の厚さや竿の珠文帯は近江式を示し、笠の蕨手の巻き具合や基礎の反花と円坐間の溝の力など鎌倉中期の手法で、竿に「文永七年庚午五月七日造立之」の銘が見られます。

また、無銘ですが同時期のものと考えられる同市逢坂一丁目の関蟬丸神社の六角形燈籠（重文）は、建部神社のものにも勝る端正な姿をしています。本殿垣外左方の木陰に建っていて、時雨燈籠と呼ばれているように、その瑞々しさは見事なものです。竿も珠文帯の四方に蓮珠文を飾るなど心憎い気のくばりようです。

14世紀の燈籠

この時代には形のよく整った燈籠が造られていますが、末になると形式化して弱々しくなってきます。八日市市神田町の河桁御河辺神社の六角形燈籠（重文）は、容姿からも意匠から見ても県下では勿論、わが国でも屈指の優れたものです。本殿玉垣内右手に建ち、火袋は鉄線で補強されています。火袋と中台は簡素ですが、基礎は壇上積式とし、格狭間のない代りに孔雀、獅子、三茎蓮を輪郭内に浮彫とし、竿の中節珠文帯の四方に十字文を飾り、笠の蕨手の心を孔にして巻込みの動き

建部神社石燈籠



関蟬丸神社石燈籠

河桁御河辺神社石燈籠

高木神社石燈籠

三大神社石燈籠

鏡神社石燈籠

を見せ、宝珠には火焔の線をつくり出すなど独創的な手法を見せてくれます。火袋に延慶4年（1311）の銘があり、13世紀の粗野な鈍重さから軽快清潔な姿に変る過渡期の作品として実にすばらしいものです。

これに次ぐ作品としては、蒲生郡蒲生町岡本の高木神社六角形燈籠（重文）があります。境内社日吉神社の向って右方に建つもので、基礎は壇上積式となり、中台の側面に三茎蓮や散蓮を飾った全体に調和のとれた秀作で、左方のものと比べると時代の力強さがはっきりわかります。火袋に正和4年（1315）の銘があります。この期の銘のある燈籠は、他に20基程も数えられますから、いかに沢山の造立があったかが知れましょう。

角柱の燈籠

草津市志那町吉田の三大神社の六角形燈籠（重文）は、竿に正応4年（1291）の刻銘がありますが、県下では珍らしく竿も六角になっています。全体の姿は矢張り13世紀の壮重さを装い、中台や火袋がしっかりしています。火袋の壁面に蓮坐上月輪に梵字カ（地蔵）を刻んでいるのも見事です。高島郡高島町拝戸の水尾神社の六角形燈籠も竿が六角ですが、時代もほぼ同じ頃のもので、火袋に四天王が陽刻されているのが立派です。この燈籠は、先年盗難に逢ったことがあるので、現在は金網の内におさめてあります。

蒲生郡竜王町鏡の西光寺跡には八角柱の燈籠がありますが、これは石幢の変形といってよく、笠に蕨手はなく火袋には六地蔵が刻まれています。中台も蓮台式で柱に応永28年（1421）の銘があって重文に指定されています。四角形燈籠の竿が四角形で現存するものとしては、蒲生郡竜王町綾戸に所在する苗村神社の桜門脇にある応永35年（1428）のものと、東本殿参道に建つ永享2年（1430）のものだけで、無銘のものでは、大津市大石竜門町八幡神社にあるものぐらいです。

まとめ

県下には慶長以前の燈籠が102基数えられます（昭和52年現在）。近世のものでも、松並木の下に並ぶ燈籠の風情や、旧渡し場や船着場に建つもの、道標兼用のものなど、民俗資料的なものが沢山残っています。私達は、庭前の燈籠に生活の安らぎを感じるように、いつも身近に愛していきたいものです。

（宇野健一氏提供）

近江の石燈籠一覧（抄）

名　　称	所　在　地	時代・年代（推定）	備　　考
西教寺石燈籠	大津市坂本本町	鎌倉	重文
関蟬丸神社石燈籠	大津市逢坂一丁目	鎌倉	重文（時雨燈籠）
建部神社石燈籠	大津市瀬田神領町	鎌倉　（文永７年）	重文
河桁御河辺神社石燈籠	八日市市神田町	鎌倉　（延慶４年）	重文
三大神社石燈籠	草津市志那町	鎌倉　（正応４年）	重文　竿六角
高野神社石燈籠	栗東町大字辻	鎌倉	重美
阿弥陀寺石燈籠	栗東町大字東坂	室町	町文
宗泉寺石燈籠	野洲町大字妙光寺	鎌倉	重美　火袋がよい
常楽寺石燈籠	石部町大字西寺	室町　（応永13年）	重文
八王寺神社石燈籠	甲西町大字菩提寺	南北朝（貞治４年）	重美
観音寺石燈籠	甲西町大字夏見	室町	町文
夏見神社石燈籠	甲西町大字夏見	鎌倉	町文火袋・宝珠後補
沙々貴神社石燈籠	安土町大字常楽寺	鎌倉	町文
高木神社石燈籠	蒲生町大字岡本	鎌倉　（正和４年）	重文
馬見岡綿向神社石燈籠	日野町大字村井	鎌倉	重美　基礎円形
諸木神社石燈籠	日野町大字北脇	鎌倉	重美　火袋がよい
岡崎神社石燈籠	日野町大字徳谷	室町	町文
竹田神社石燈籠	日野町大字小谷	室町	町文
石造燈籠	日野町大字石原	南北朝（貞和　）	町文
鏡神社石燈籠	竜王町大字鏡（西光寺跡）	室町　（応永28年）	重文　石幢風
白鳥神社石燈籠	永源寺町大字高木	室町	町文
望湖神社石燈籠	能登川町大字伊庭	南北朝	町文
都久夫須麻神社石燈籠	びわ町大字早崎（竹生島）	南北朝	町文
饒石神社石燈籠	近江八幡市西庄町	鎌倉　（永仁６年）	
日吉神社石燈籠	八日市市上平木町	鎌倉　（正和３年）	宝珠後補
三所神社石燈籠	八日市市市辺町	南北朝（建武４年）	八角形・火袋に仏像
和田神社石燈籠	蒲生町大字平林	鎌倉　（文保　）	火袋に仏像
竹田神社石燈籠	蒲生町大字鋳物師	南北朝（康永３年）	
苗村神社石燈籠	竜王町大字綾戸	南北朝（建武３年）	火袋に散蓮